

「AIR 南山城」(Artist in Residence 青い家) へ行く 目黒郁朗

＜車で行く＞ 南山城村は京都府の南端にあり、奈良・三重県境に接している。

「AIR 南山城村」は、古民家を改造した展示ギャラリーである。数年前、大阪市の靱公園横のビルから引っ越した。A3を半分折りにした立派な案内パンフを受け取って3、4年前、自分の車で行ったことがある。関西本線・月ヶ瀬駅口駅あたりから曲がりくねった山道を上がりダム橋を渡ってダム湖横を走り更に奥へ入る。休校となったコンクリート二階建ての小学校の校舎と体育館が残された近くの田畑の脇にあるが初めは迷った。入り口の壁などに各地の美術展のハガキなどが所狭しと貼られており「ここだな」と確信させられる。中に入ると黒ずんだ柱が土壁に縦横に組まれており作品に向き合える。一人やっと上れる梯子のような階段の上にも暗い展示場がある。かつては物置であったかも知れない。前回はギャラリー白でおなじみの車史曖さんが導いてくださった。そこからさらに砂利まじりの道をうねりながら上がって行き二三度三叉路を小さな表示を頼りに曲がって行くと屋根が見えてくる。その庭で、もう一人の作家である若い男性が絵を描いていた。いやこれは前回の話である。

＜電車とバスで行く＞ 1918年11月24日、 JR 大阪駅環状線ホームから

大和路快速に乗り込み、法隆寺・奈良などを経て加茂駅で亀山行きの二両編成ワンマンカーに乗り換える。並行して走る木津川と間近に盛り上がる山並み、そして所々に村落が見えてくる。月ヶ瀬口駅で運転士に切符を手渡し降りる。バス停でひとり待ち、13時15分発、乗客は私一人、「峠出ですかね？」と運転手から。そしてずっと誰も乗ってこないままだった。運転席から道案内までしてもらい“ギャラリー”に近づくと初老の女主人がお出迎え。いや何も電話もしていませんよ！戸口で老農夫が鎌を研いでいる。「主人ですよ、畑を作っています」「いま作家さんは向こうへ出かけています。お話をしておきたいと」。中に入りひとりゆっくり鑑賞させてもらおう。右のずっと奥の方の暖炉で炎が躍っているのが見て取れる。案内のプロフィールから作家さんは33歳ぐらいの女性とわかる。女主人に「ここでは若い人が殆どですね」と言うと「ええ、出来上がっている人は呼びません」と。「私も出来上がっていませんけど」と苦笑い。

いったん外に出て明るい日差しの中を“第2ギャラリー”へ向かう。木立が長い影を引く坂道、ゆったりとした間隔で左右向こうの方に農家が見える。やがて幾筋もの刈そろえられた茶畑が丘の起伏に沿って、ずっとうねって続いている。遠くに杉か檜あるいは柿などを配して農家の薨。道は下りにかかり野菜畑のかどにかかしが二体、なんともうれしい。白い目深の頭巾にピンクの柄の作業着の農婦が両手を一直線に伸ばす。一つは豊満な体の白い“ロバ”。二つ合して造形作品とも感じる。うねって下って曲がって雑木の向こうに見覚えのある広場の庭と古い農家。入り口が少し開いて人影。ここの作家さんと「向こうの」作家さんだ。「この人」吉岡滋人さんは頑丈で図体大きくヒグマ(ただしスマート)の印象というのは、北海道の人と聞いたからとチェンソーカービングで荒削りで大きな木彫りをやっているから、私が勝手に脳裏に焼き付けたイメージ。緑の庭に面した縁側に木目も露わな板を組み立てた台に載せた妊婦のトルソが開け放した畳の間から見て取れる。後で

見る二階の石膏デッサンと重なる。妻がモデルという。暗い土間の足元には鴉が二羽いる。北海道の仕事があるので最初と最後の日だけのこちらというのだから会えて良かった。経歴を見ると40代後半か。お二人の語らいを中断させてしまったと詫びながら其処を出た

今度は来た道と反対方向に坂を上がってみた。幾筋もの茶の木葉の畝が両側に広がっている。背中に機械を背負って肥料を施している一人の農夫が見える。東の方向はるか遠くに薄青い山並みがたなびくように長く伸びている。そこにかすかに見える林立する白い塔のようなものは風力発電の風車ではないかと思った。青山高原か？

下方の“第一ギャラリーへ戻る。その展示作家・中道由貴子さんは戻っていた。青と緑を主調に水の中を感じさせる中に多様な植物たち（動物もうごめいているかも）がそれ

ぞれの命を展開しているイメージの作品が最も印象に残った。「^{みなかたくまぐす}南方熊楠を知っていますか」と聞いてみた。「はい」。その先は、いつか語れる時が来るだろうか。京都市内の小学校で図工専科を担当しているという。子どもたちの様子も聞いてみた。1985年大阪生まれ。やや小柄で透明感のある声と表情が印象に残った。

目黒郁朗（関西美術家平和会議会員）

後記

ここに記した光景は、大都市からは見えてこない。「できあがっていない」若いアーティストたちは何を求めて、敢えてここで個展をやるのか。その問いの前に、このギャラリーはどういう意図で大阪市の真ん中からここに移って来たのか、その目的はどこまで達成できているのか、「AIR 南山城」にお話を伺わなければなりません。

一方で関西美術家平和会議のホームページに「なぜこのような内容の寄稿をしたのか」私自身の意図を語らなければならないでしょう。今回の寄稿を削除してもらってから後のことになってしまうかも知れません。